

子宮肉腫について



子宮肉腫（しきゅうにくしゅ）は子宮筋腫と、とても紛らわしい稀少疾患です

40代～60代の女性に多く、子宮の筋肉組織やその他の支持組織の中に悪性（がん）細胞ができる疾患です。2019年の1年間に日本全国で診断・治療された患者さんは476名と稀な病気です（日本産科婦人科学会調査）。子宮肉腫は予防法や治療方法が確立されていない「稀少がん」のひとつで、良性の子宮筋腫と臨床症状や検査結果が区別できないことも多く、子宮摘出後の病理検査で診断される場合もあります。

子宮肉腫の原因

明らかな原因はわかっていません。

子宮肉腫の症状

「生理の量が異常に多い」、「月経が長引いてしまう」といった月経過多・月経異常や、「閉経したはずなのに、出血がある」、「月経の周期とは関係のない出血が増えた」など不正出血が最も多い症状とされます。そのほか、「お腹が張って痛い」などの下腹部の痛みや膨満感、骨盤の痛み、おりものの増加などの症状や、膀胱が圧迫されることによる頻尿や便秘、腰痛などが起こるケースもあります。

しかしながら、これらの症状はありふれた子宮筋腫と共通のため、症状だけで判断することはできません。

子宮肉腫の診断

まず触診（内診）を行い、超音波（エコー）検査で腫瘍の大きさや場所の確認も行い、必要であればMRI検査も追加します。

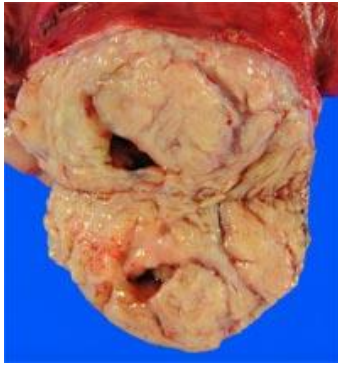
子宮筋腫はしばしば二次的に変性（へんせい）することがあります。変性とは子宮筋腫の細胞が液状化したり、石灰化、内出血など多彩に変化することで、変性した子宮筋腫と子宮肉腫を一回の超音波やMRIで判別することは困難です。良性の子宮筋腫と考えた場合も大きさや性状を繰り返しチェックしていくことが重要です。

子宮肉腫の治療

手術前に子宮肉腫と診断された場合は開腹手術によって子宮や卵巣、リンパ節などを切除し、可能な限りの腫瘍を取り除いていく手術が基本です。子宮筋腫として手術、摘出した組織を顕微鏡で病理学的に調べた結果で肉腫と診断されることも少なくありません。放射線や抗がん剤など手術以外の治療法は確立されていません。

子宮肉腫の予防

良性の子宮筋腫と悪性の子宮肉腫の判別は難しいため、子宮肉腫を早期発見・早期治療するために定期的な婦人科検診によって子宮の大きさや状態を以前と比較していくことが重要です。子宮筋腫といわれた人は、定期的な検診を心がけ、とくに急激に大きくなった場合や閉経後に不正出血などの異常が出た場合は、早めに受診してください。



変性した子宮筋腫（左図）と子宮肉腫（右図）：国立がん研究センター、稀少がんセンターHPより